大分県立大分豊府中学校・高校

多様な資質・能力の育成

「世界標準の学力」の育成に向け、中・高の教師が目線を合わせた指導改善を推進

変革のステップ

背景と課題

- 2014年度、大分県教育委員会から思考力・判断力・表現力の育成についての研究指定を受けたことをきっかけに、多様な資質・能力から成る「世界標準の学力」の育成を強化することを目指す

実践内容

- **「主体的・対話的で深い学び」の推進**　全学年の全教科・科目で「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業づくりを推進。思考力・判断力・表現力を評価するルーブリックを作成し、全教科・科目で定期考査の出題を工夫したり、独自のアセスメント「ＪＥＴテスト」（＊1）を開発したりするなど、指導と評価の一体的な改善に力を入れる
- **6年間を通した探究学習を導入**　生徒の学びに向かう力を高めることを目指し、中高6年間をかけて取り組む探究学習「ミラNavi」（＊2）を始める
- **主体的学習への意識づけを強化**　高校では、自分の必要に応じた学習計画をスケジュール帳「きせきノート」（＊3）に立てるよう指導

成果と展望

- 自分の考えを練り上げ、適切に言語化する生徒や、自分の強みや課題を意識して学習する生徒が増加

PROFILE

校訓に「感動 理知 友愛」を掲げる。国際社会で活躍できるよう、高い志を抱き、主体的に学び、行動する生徒の育成に力を入れている。2007年度、同県立大分豊府中学校を併設し、併設型中高一貫校となった。

設立	1986（昭和61）年
形態	全日制／普通科／共学
生徒数	中学校1学年約120人、高校1学年約280人
2019年度入試合格実績（現浪計）	国公立大は、東北大、一橋大、京都大、九州大、大分大などに165人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大、関西学院大などに延べ213人が合格。
住所	〒870-0854　大分県大分市大字羽屋600-1
電話	097-546-2222
Web site	http://kou.oita-ed.jp/oitahoufu/index.html

生徒の多様な資質・能力を高め、グローバル人材の育成を目指す

大分県立大分豊府中学校・高校は、旧帝大などの最難関国立大学に合格者を毎年送り出す県内屈指の進学校だ。国際社会に貢献できる人材を育てるべく、「世界標準の学力」「世界標準の人間力」「凛とした生活態度を基盤とした自律力」の総合的な向上を図っている（図1）。

「世界標準の学力」は多様な資質・能力から成ると、曽根崎靖校長は語る。

「変化の激しい現代社会では、従来にはなかった課題が出現しています。それらの課題に取り組む上で必要な新しいアイデアを生み出すためには、単に知識・技能を習得するだ

＊1　思考力・判断力・表現力を測るアセスメント。「Judgement」「Expression」「Thinking」の頭文字を取って命名。
＊2　「未来 Navigation」の略称。
＊3　名称には、「日々の軌跡の振り返りを次の行動に生かすことが、奇跡的な成果につながる」という意味が込められている。

けではなく、知識・技能を臨機応変に活用することが求められます。また、考え方の異なる他者と協働できるよう、多様性への理解を深めたり、目標の達成に向けて試行錯誤を繰り返す粘り強さを身につけたりする必要もあるでしょう。そうした様々な資質・能力の育成を大切にするという方針は、大学入試改革や次期学習指導要領が目指すところとも合致すると考えています」

同校では、2014年度から3年間、同県教育委員会の「思考力・判断力・表現力を育成するための指導方法の工夫改善についての実践研究」事業の指定を受けたことをきっかけに、「世界標準の学力」の育成を強化。全校体制で指導改善を推進することにした。

校長
曽根﨑 靖 そねざき・やすし
教職歴36年。同校に赴任して3年目。「自らの素直さや他者への誠実さ、そして粘り強い努力は、すべての可能性への扉を開く」

教科統括領域主任
池邉良介 いけべ・りょうすけ
教職歴30年。同校に赴任して2年目。国語科。「生徒とともに学び、生徒とともに成長する教師でありたい」

教務領域主任
西 裕一郎 にし・ゆういちろう
教職歴21年。同校に赴任して6年目。地理歴史・公民科。「人は魂の耕作者なり。一授業者として、日々の研鑽を忘れずにいたい」

進路領域主任
中原久典 なかはら・ひさのり
教職歴20年。同校に赴任して16年目。数学科。「『立たされた所で泉を掘る』。どのような状況でも前向きに挑戦する生徒を育てたい」

中・高の教師が互いの指導の強みを学び合い、新しい授業づくりを推進

生徒の思考力・判断力・表現力を育成できるよう力を入れているのが、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業づくりだ。全学年の全教科・科目の授業で、生徒に深い思考を促したり、話し合いや発表をさせたりする場面を積極的に設定している。ICTの活用も推進したことで、教師による解説や板書の時間が短くなり、生徒の協働学習などにより多くの時間を充てられるようになった。自分の授業スタイルを変えることに戸惑う教師もいたが、次第に前向きになっていったという。その要因としては、週1回、教科ごとに中・高の全教師が集まる合同教科会議など、中・高が連携して指導を検討する機会が充実していることが大きかったと、教務領域主任の西裕一郎先生は振り返る。

「中・高の教師が協働することで、中学校籍の教師は、高校籍の教師の強みである専門性の高い指導を、高校籍の教師は、中学校籍の教師の強みであるきめ細かな指導を学び合えます。また、ほかの教師の発問の仕方やICTの使い方などを見る機会も少なくありません。そうした中で、教師一人ひとりに自分の指導を改善していこうという意識が醸成されていきました」

新しい授業づくりにあたっては、思考力・判断力・表現力の評価の基準や観点を確立する必要があった。そこで、合同教科会議で議論を重ね、各教科・科目のルーブリックを作成した。

「ルーブリックの検討を通して、教科団として生徒にどのような資質・能力を育成したいのか、共通理解が深まりました。そうした根本的な議論を行ったことで、指導のノウハウだけではなく、『育てたい生徒像』も共有

図1　大分豊府中学校・高校が大切にする3つの力（2019年度）

世界標準の学力
新しい時代に必要な資質・能力
- 知識・技能の習得
- 思考力・判断力・表現力
- 学びに向かう力・人間性　など

→授業を中心に育成

世界標準の人間力
体験活動で育む心身のたくましさ
- 感動する力と心
- 豊かな感性
- 困難に打ち勝つ力（レジリエンス）など

→学校行事・生徒会活動・部活動を中心に育成

凛とした生活態度を基盤とした自律力
誠実・素直な心
- 傾聴力　- 清掃力　- 挨拶力　など

→生徒指導を中心に育成

＊学校資料を基に編集部で作成。

され、中・高の教師間で目線の合った指導改善の実現につながりました」（西先生）

生徒の思考力・判断力・表現力を客観的に把握し、指導改善に生かす

授業づくりの進展に伴い、定期考査でも思考力・判断力・表現力を測る問題を課すようになった。現在は、全教科・科目で毎回必ず出題している。国語では記述式問題を工夫していると、教科統括領域主任で国語科の池邉（いけべ）良介先生は話す。

「以前の定期考査でも記述式問題を出していましたが、授業での学習内容を覚えていれば対応できる問題が多かったと思います。そこで、授業で扱った内容に関連する別の内容を出題するなど（**図2**）、生徒にその場で考えさせる問題を取り入れています」

思考力・判断力・表現力を客観的な指標で把握できるよう、アセスメントも活用している。具体的には、中学校で「中学総合学力調査」（＊4）を導入し、その結果を指導に反映させている。さらに、17年度からは、国語、地理歴史・公民、数学、理科、英語の各教科の合同教科会議で独自のアセスメント「JETテスト」の開発に着手。18年度に、中学3年生～高校3年生を対象として1回実施した。19年度からは全学年で年1回実施する予定だ。

「思考力・判断力・表現力がより求められる『大学入学共通テスト』に向けて、さらなる指導改善を図るため、生徒の実態把握を強化したいと考えました。同テストの試行調査の問題を分析しながら、『JETテスト』の開発を進めています」（池邉先生）

探究学習で課題発見力を育み、生徒に将来の目標を考えさせる

18年度からは、「世界標準の学力」のさらなる向上を図るために、2つの取り組みを始めた。

1つめは、課題発見力と問題解決力を身につけられるよう、中高6年間をかけて行う探究学習「ミラNavi」だ。「総合的な学習の時間」を中心に、中学1年次～高校2年次までは、「大分県」「地域との共生」といった段階的なテーマの下、グループで文献調査やフィールドワークなどに取り組み、地域や社会の課題を探りながら、自分たちにできる具体的な方策を考える。その内容は定期的にレポートなどにまとめ、クラスや学年集会で発表する。

「社会に出れば、他者からの指示に従うだけではなく、主体的に課題を見つけ、問題解決を図る必要があります。そこで、生徒自身が『問いを生み出す』練習を積めるよう、『ミラNavi』を始めました。生徒はグループ活動を通して、1つのテーマでも、問いの立て方によっていくつもの見方ができることに気づき、視野を広げていきます」（池邉先生）

学校行事の内容も、「ミラNavi」の趣旨に応じて見直した。例えば、高校2年次にカナダに行く修学旅行では、文化の違いや国のあり方などについて考えを深められるよう、現地の大学生や高校生との交流活動などを取り入れた。

そして、高校3年次には、生徒一人ひとりがそれまでに探究した内容をまとめ、自分の目指す社会貢献についての論文を作成する。それには、広い視野から社会を捉え、将来の目標を考えさせようというねらいがある。

図2　2018年度3学年1学期末考査の国語（現代文）の問題と解答例・採点基準（抜粋）

問い［6点］

課題文の冒頭では、「誰かとつながっていたい」という思いを持つ人々が電車の中で携帯電話をチェックする姿が取り上げられているが、この現象についてAさんが次のように疑問を述べた。その疑問に対して筆者の立場から50字以内で答えよ。

Aさんの疑問　「誰かとつながっていたい」という思いを持っているのなら、実際に会って話をすればよいのではないか。携帯電話でつながろうとするから、一層うわべだけのつき合いになって自己存在感が得られないのではないだろうか。

解答例・採点基準

◎解答例

・ⓐ自己存在感の危機を恒常的に感じているので、ⓑうわべだけでも、常に誰かとつながっていたいと考えるため。

◎採点基準

ⓐ…生活上のコンテクストの喪失、自己存在の危機・喪失という状況を踏まえている。

ⓑ…携帯電話の特質（「常時」「手軽に」「遠くの人と」「幅広く」つながることができる）が、実際に会うことより有効であることが示されている。

※a・b各3点。bがなければ全体0点。aとbの論理的齟齬は2点減。文末不備は1点減。

＊学校資料を基に編集部で作成。

＊4　ベネッセのアセスメントの1つで、「教科の思考力・判断力・表現力」を測定し、レベル別・段階別評価を行うテスト。国語・数学・英語に加え、教科融合型のテストも含まれる。

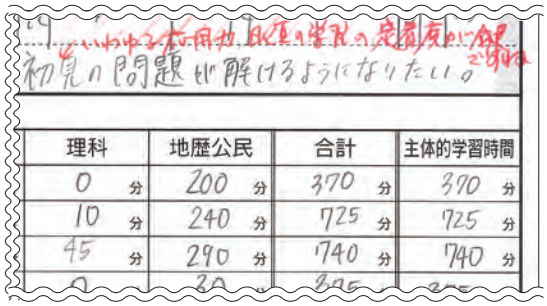
スケジュール帳を改良し、主体的学習にこだわらせる

2つめの取り組みは、高校において主体的に学習する姿勢を身につけるための、学習計画作成指導だ。

「本校の生徒は、教師に指示された学習にしっかり取り組みますが、指示を受けて動くだけでは、国際社会のリーダーは務まらないでしょう。本校が目指すのは『世界標準の学力』です。生徒には、学習の必要性を自覚し、学習を通して、自分の強みを伸ばしたり、苦手を克服したりすることができるようになってほしいと考えています」（曽根﨑校長）

18年度には、全教科・科目で課題の分量を減らすとともに、生徒が自分で時間を管理する習慣が身につくよう、学校オリジナルのスケジュール帳「きせきノート」に毎週の学習計画を立案させた。それは、生徒が自己管理の一環として以前から活用していたもので、週ごとに自分の目標を書く欄や、毎日の学習時間を記録する欄などから成る。毎朝のホームルームで担任が回収し、内容を点検してコメントを書いた後、生徒に返却している。19年度からは、生徒が自分に必要な学習をより意識できるよう改編し（**図3**）、毎日の学習で主体的に取り組みたい教科・科目とその内容を書く欄などを新設した。進路領域主任の中原久典（ひさのり）先生は、「きせきノート」の役割をこう述べる。

図3　「きせきノート」（2019年度版）



理科	地歴公民	合計	主体的学習時間
0 分	200 分	370 分	370 分
10 分	240 分	725 分	725 分
45 分	290 分	740 分	740 分

毎日の学習時間を記録する欄には、自分で見つけた課題に取り組んだ時間を記入する「主体的学習時間」の項目を新設した。

＊学校資料を基に編集部が一部改編。図3に示した「きせきノート」のページの全体は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト（https://berd.benesse.jp）でダウンロードできます。「HOME→教育情報→高校向け」でご覧ください。

「『きせきノート』には、担任と生徒とのコミュニケーション・ツールとしての役割もあります。生徒の変化を早く、適切に把握し、頑張っていれば褒め、課題があれば励ます担任が目立ちます。担任からの声かけにより、学習に意欲的になる生徒も少なくありません。そうした関係を生かし、見えにくい資質・能力である『学びに向かう力』の向上を図りたいと考えました」

19年度からは、各学年の単位数を以前の35単位から32単位へ変更し、生徒が自由に使える時間を増やし、高校の全学年で毎日の始業前8時00分～8時20分に設定されている「Hofu Time」の内容も工夫した。具体的には、週に1回、NIE（＊5）を取り入れ、高校1年次には、英語のスピーキング活動に力を入れるが、高校2・3年次には、「きせきノート」に計画を立てた教科・科目の主体的学習を中心に取り組ませることにした。金曜日は、全学年で翌週の計画立案の時間とし、「きせきノート」に目標の達成状況や日々の学習の中で感じた課題を書くとともに、翌週の目標と学習計画を立てさせている。

「以前から、自分の強みと課題を踏まえて学習計画を立て、実践する生徒もいました。全生徒がそうした主体的な学習を確立し、メタ認知を深められるようになることを目指しています」（中原先生）

生徒や社会の変化に応じながら、よりよい指導を追究していきたい

一連の指導改善を通して、生徒には多様な資質・能力が育まれている。例えば、自分の考えを整理し、堂々と述べられる生徒が全学年で増えた。高校では、休み時間や放課後に教師に質問をしたり、始業前や放課後に自習をしたりする生徒が多くなり、主体的な学習が定着しつつあることがうかがえる。今後は指導改善をさらに発展させていく決意だと、曽根﨑校長は語る。

「指導改善は、生徒や社会の変化に応じて続けていくことが大切です。現在のように変化が急速に進む社会では、その必要性がさらに高まるでしょう。本校には、中・高の教師が協働して指導力を高めるという文化が根づいています。よい伝統を継承し、今後も先生方と力を合わせていきたいと考えています」

＊5　News paper In Education の略。新聞などを教材として活用する教育活動。